

新たな職種「里山保育士」の提案

～公立園で自然を活用した子ども主体の保育を“日常化”するための実践～

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 今井 英里

1. 研究の背景

やりたいことを無心にやる子どもたちを心から応援したい！そう思い、私は保育士になった。

しかし勤務先は、保育士が大勢の子どもを誘導する「保育士主導」タイプの園で、個々の“やりたい”を応援することなどできなかつた。そんな保育に疑問を感じていた頃、森林文化アカデミーの萩原裕作准教授が来園し、森で子どもたちと遊ぶ様子を見る機会があった。そこには、同じ子どもたちとは思えないほど主体的に遊ぶ姿があった。衝撃的だった。子どもたちの“やりたい”を応援する大人の存在と自然空間が持つチカラが、子どもたちの主体性を引き出したのではないかと考えた。自然の中で子ども主体の保育ができるようになりたい！と思い、本学に入学した。

在学中、森の知識や技術を学ぶと同時に、公立園へ実習に行く機会があった。意外なことに私同様、多くの保育士が従来の保育に疑問を感じ自然の中で子ども主体の保育を望んでいることが分かった。一方、それを「変えていく」には課題が多く、園を内側から改革する難しさも知った。

ならば、主体性を引き出す技術や野外技術を有する専門保育士が、「外側から」「頻繁に」関わることで、自然を活用した子ども主体の保育が“日常化”するのではないかと考えた。

2. 研究の目的

公立園における自然を活用した子ども主体の保育の“日常化”を目標に、「外側から関わる専門保育士」の現場側の需要とその可能性、園や保育士への効果的な関わり方について、実践を繰り返しながら、検証していくことを研究の目的とした。

3. 研究の流れ

- ①基礎調査（文献調査・保育士への聞き取り調査）
- ②公立園での実践（保育士改造大作戦）
- ③実践での考察・検証
- ④まとめ

4. 基礎調査

4-1. 文献調査

「自分の意思で判断し行動する」ことを意味する主体性は、これからの時代を生き抜くために必要だと言

われる「21世紀型スキル」の習得に欠かせない。

全国の保育園の理念や計画の元になる「保育所保育指針」には、子どもの主体性を大切にした保育を行うよう記載されている。また自然との関わることの大切さについても触れている。幼児期に欠かせない五感を育む体験や、主体性が発揮されやすい環境として、自然空間は、幼児期の成長にとってまさに理想的な環境であることが分かる。

4-2. 聞き取り調査

近隣公立園の保育士28名に聞き取り調査を行った。多くの保育士が、自然の中で子ども主体の保育を肯定的に捉えていながら、実際は十分にできておらず、保育指針に沿った保育ができていないことが分かった。

原因として、行事の多さや保育士不足、保育士の原体験&自然体験不足、新しいことをやるモチベーションの不足などがある。「外側から関わる専門保育士」の必要性については、需要が高いことも分かった。

新たな変化を生み出すには、外側に関わりながら、現場の保育士の意識を徐々に変えていくことが重要。その障害となるのが、以下のような保育士の内面的な要因（意識、考え方、体験）にあることが見えてきた。

<障害となる保育士の内面的要因>

- 森で何をすればよいかわからない。
- 保育は室内、行事は必須という固定観念。
- 新しいことに挑戦できない・自信がない。
- 主体性を促す関わり方がわからない、知らない。
- 保育士の原体験・自然体験不足。
- 楽しさを知らないために、行動に移せない。
- 保育士自身が主体的に生きていない。

5. 実践・考察

自然を活用した子ども主体の保育を“日常化”するには、障害のひとつである保育士の内面的要因を解消する必要がある。その手法を見出すために公立園で、自らが外側から関わる専門保育士となり、各要因を解消するのに効果的と思われるアプローチを現場で試し、その後の保育士の意識や行動の変化を観察・聞き取りをし、効果のあった手法をまとめていった。まとめたうちの4つの手法について次に紹介する。

実践日数：26日間（令和元年6月～令和3年1月）

実践現場：美濃加茂市立山之上こども園

美濃加茂市立ほくぶ保育園

5-1. アプローチ① そのまま森でやっごらん

【障害となる保育士の内面的要因】

原体験もないので森で何をすればよいかわからない。保育は室内でやるものだという固定観念。

【試行した解消アプローチ】

新たなことをやるのではなく、普段部屋の中でやっていること（朝の会・お話・昼寝）をそのまま森でやってみてもらった。

【保育士の反応】

単純な発想の転換だけに当初は戸惑っていたが、やってみると子どもたちの反応もよく、それに刺激されてか、保育士自身も楽しそうにやっていた。その後も工作など思いついたことを森の中でチャレンジする姿があった。



5-2. アプローチ②「やりたい！」応援します

【障害となる保育士の内面的要因】

新しいことに挑戦するのが心配・自信がない。

【試行した解消アプローチ】

保育士の「やりたい」に共感し応援する。やってみたいことを聞いたところ「焚火で焼き芋を作りたいけど自信がない。」ことが分かったので、園庭で焼き芋会を一緒にやってみた。

【保育士の反応】

実施後、次は自力でやりたい！と意欲的な言葉が出た。ほんのちょっとしたサポートが、新たなことにチャレンジする自信をつけたとともに、保育士が「やりたい」を応援してもらう体験を通して子どもたちの気持ちも改めて実感できたようだ。

5-3. アプローチ③ 共通体験してすぐふりかえり

【障害となる保育士の内面的要因】

主体性を促す関わり方がわからない。

【試行した解消アプローチ】

現場で主体性を促す関わり方を目の前で見てもらい保育終了後、お茶をしながらその日のうちにエピソードをふりかえり話し合った。

【保育士の反応】

エピソードを振り返るだけで主体的な関わり方について具体的に共有することができ、効果的だった。しかし、保育時間終了後すぐ帰宅するパート保育士もいたため、ふりかえりの時間が取れない人もいるという別の課題も見えてきた。パート保育士が半数を占める園もある。

関市では、一日の流れや関わり方、起きたことをみんなで記録して写真付きのレポートをまとめている。そうすることでパート保育士とも情報交換できるかもしれないと感じた。

5-4. アプローチ④ 子どもになって遊びきろう

【障害となる保育士の内面的要因】

保育士の原体験・自然体験不足。楽しさを知らないでモチベーションもない。主体的に生きてない。

【試行した解消アプローチ】

まずは保育士が自然の中で過ごす楽しさ、思い切り遊ぶ楽しさを存分に味わう空間を設定してみた。

【保育士の反応】

自然の中で子どものように遊ぶことで、その心地よさや楽しさを頭ではなく体で感じてもらった。体験後、さっそく普通の保育を見直して自然体験を取り入れたという報告があった。

5-5. その他の効果的な関わり方

試行を繰り返していくうちに、他にも様々なアプローチを見つけることができた。それらについては論文の本文で紹介したいと思う。

5-6. 園・保育士の変化

訪問園に大きな変化があった。運動会を森で実施したり、今まで園庭でやっていた朝の自由遊びの時間を森に行ったりという見事な変わりようだ。さらに森あそび専用の道具入れも森に設置していた。日々の保育に自然環境を積極的に活用しようという意思の表れだ。

また、好きな時間に給食を食べる試みや、子どもの遊びを止めない努力など、集団誘導的な保育から、個を尊重した主体的な保育への変化も実感できた。



6. まとめ

以上の結果から、「外から関わる専門保育士」の現場側のニーズは高く、外の立場から頻繁に関わることで、自然を活用した子ども主体の保育が“日常化”する可能性は十分にあると言える。

一方で、保育士の内面的な障害とは別に、人員不足やパート職員の増加、低い待遇など保育現場の根本的な問題がもうひとつの障害になっている。これらについても、早急に改善していく必要性を強く感じている。

7. 今後の展望

私は卒業後、美濃加茂市で保育の現場に戻り、自然の中で子ども主体の保育を促す専門保育士として活動する予定だ。市が進める里山千年構想にちなんで、この専門保育士を『里山保育士』と名付けたい。

今後は日本初の『里山保育士』として、今回の研究で確かめた効果的なアプローチを武器に、現場に貢献していくつもりだ。また、普及を目的に里山保育士の育成・養成にも取り組んでいきたい。